

SD 9808

9808 | Space Design

創刊号 1971年10月号
#1010 1998年12月号
創刊 1971年
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
TEL: 03-5561-1111 FAX: 03-5561-1112

SD

Design Vocabularies of Light:
LPA Works 1990-1998

光のデザイン・
ヴォキャブラリー:

LPAの仕事1990-1998

光のデザイン・ヴォキャブラリー!!
LPA 1990-1998

Design Vocabularies of Light:
LPA Works 1990-1998

Monthly Journal of Art and Architecture

海外レポート

バルセロナ、次世代建築家の
現実感

from Barcelona

福田 誠

バルセロナは、現在かつてほど建築プロジェクトは動いていない。なかなか建たないというのが現実だ。そんな状況の中、次世代となる若手が入選した小都市の旧市街修復再生コンペをレポートする。このコンペは1998年3月に実施され、最近発表されたものである。以下、その取材の過程で垣間見た、現在のバルセロナの仕事場の空気をお伝えする。まず作品に触れる前に、現在のスペインのコンペについて若干の説明をしておく。

1995年5月に現在のコンペについての法律が制定された。公共建築(もちろん土木も含む)の計画のほとんどが、コンペを通して決定されるというものである。歓迎すべきことだがコンペの現実にはなかなか厳しい。特に若手にとっては非常に厳しくなったと言えるだろう。なぜなら二段階選抜がほとんどなのである。始めに経歴書の量で参加建築家を篩にかける。しかも公共建築の設計歴にしか意味がない。ある若手建築家に尋ねてみた。「チャンスが減ったのではないか?」。彼は「確かにそれほど自由に開かれているわけではないが、若手の建築家がベテランの建築家とチームを組んで参加するということが意味が出てきた。クレジットは対等に表記する。コラボレートの内容は各チーム次第。評価は結果によって与えられる」と言っていたが、これは若手にとっての言い訳か? 特に最近では設計・施工という形式のコンペが増加していること。また設計料の最低価格という制限がなくなった。設計の価値がこの国の中で低下しているのだ

ろうか。スペインの現実、日本の現状、入札制度に近い制度に移行しているのである。

今回レポートするコンペの内容は、ひなびかっている小都市の旧市街における再整備。バルセロナから中距離電車に乗って40分の海沿いにある「ヴィラノバ・イ・ジェルトルー」という小さな都市で行われた。この辺りは週末を過ごす人々やリタイアした人々が好んで住んだり、通勤することもできる町が続いている。コンペの方法として興味深い点は、各参加者がひとりの審査員を推薦する権利が与えられていることである。今回はバルセロナ大学の教授でもあるホアキン・サバテールへの推薦が多く、彼が審査員を引き受けることになった。この推薦制は多くのコンペで採用されている。他の審査員については、審査委員長に市長、政治家6人、建築家4人、市役所の企画課の代表ひとりで、サバテールを合わせて計11人。政治家が多いのが気にかかる。またコンペのプレゼンテーション量、方式などは自由。

一等は、リカルド・フローレス、エバ・ブラッツ(Ricard Flores i Eva Prats)の30代前半の建築家ふたり組(アルゼンチン人とカタルーニャ人)である。彼らはカタルーニャ建築大学を卒業し、共にエンリック・ミラーレスの事務所で経験を積み、現在バルセロナに事務所を構える。市役所でコンペの入選案をすべて見せていただいた。審査員のひとり、市の主事にあたる建築家によると、分析能力の高さ、豊かさが効を奏したそう。一等案の特徴は、ふたつの旧市街を結

※1:『住宅論』(SD選書)「失われたのは空間の響きだ」
篠原一男=著、鹿島出版会

取材協力: Ajuntament de Vilanova i Geltrú、丹下敬明

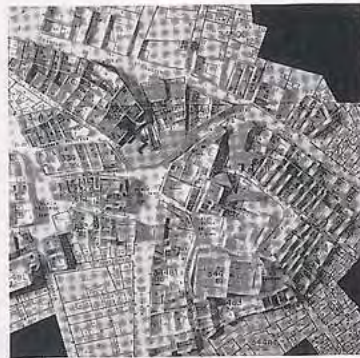
びつけるビスタの保存や再生が計画の軸となっていることにある。その軸を基準にしながら、状態の悪い建物やブロックの除去や切除、新しい機能への衣替え、プライベートな庭園の視覚化、アーチを伴った古いエントランス部分の保存対象化など、一見すると素直かつ、とりとめない細かなアイデアを重ね、遠景、中景、近景へと連続する風景に結びつけようとしている。プレゼンテーションのほとんどは手描きのスケッチ、説明文、写真のコラージュ。リサーチの上に素早くアイデアが添付される。プリミティブな手法で圧倒的な仕事量。ここにはあざやかなアイデアという印象を受ける物はなにもなく、その行為の積み重ねのなかから表現しているだけだ。彼等はその身体的なりサーチによってもう一度、自己のリアリティを探し始めているようだ。

バルセロナは、現在かつてほどプロジェクトは動いていない。また保守的な空気の中、新鮮なデザインの出現も多くはない。篠原一男の言葉を借りれば、「閉息的な状況を前進させるには、何よりも建築家自身の生存感、リアリティが必要だ」※1。確かにそのリアリティを見つめることによって、次の時代を切り開くデザインが生まれていく。仕事のない時ほど、建築の生存をかけた生命力のあるデザインが生まれていく可能性があるのだから。

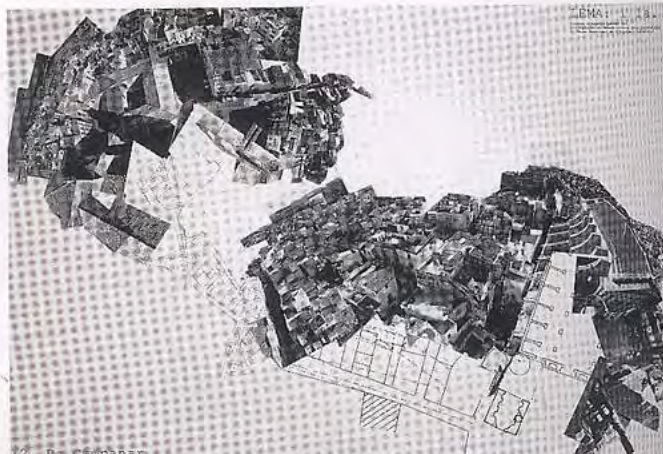
●ふくだ・まこと/エンリック・ミラーレス+ベネデッタ・タグリアブエ事務所



Vilanova i Geltrúの16世紀の地図



1等案の模型



ふたつの町をつなぐビスタのフォト・コラージュ(1等案)